

小学生と大学生の異年齢交流が子供の社会性に与える影響 — 子供教室における実践的検討 —

研究代表者 上原 美子 所属・職位 共通教育科・准教授

[要約] 「小1の壁」を打破するとともに、次代を担う人材を育成するため、全ての児童が放課後等を安全安心に過ごし、多様な体験・活動を行うことができるよう「新・放課後子ども総合プラン」に着目した。本研究では放課後子供教室について実践的検討を進め、子供教室の場の実態とニーズを把握し、異年齢で交流する活動に焦点をあて、小学生の社会性に与える影響を明らかにすることを目的とする。研究1は、子供教室の実態とニーズの把握、研究2は、大学生と小学生、異年齢の小学生同士が遊びを通じたプログラムを実施し小学生の社会性への影響を明らかにする。2020年度は研究3として、子供教室へ参加した子どもの社会性の獲得と評価及び獲得の過程を明確化する予定である。

[研究組織] 研究リーダー：上原 美子（共通教育科准教授）

研究メンバー：張 平平（看護学科准教授）、森田 満理子（社会福祉子ども学科准教授）

保科 寧子（社会福祉子ども学科准教授）、黒田 真由美（看護学科助教）

望月 浩江（看護学科助教）

外部メンバー：藤枝 静暁（埼玉学園大学）、松本 佳子（日本赤十字大学）

アドバイザー：伊藤 善典（社会福祉子ども学科教授）

1. 研究の背景

2014年度より開始された「放課後子ども総合プラン」に引き続き「新・放課後子ども総合プラン」¹⁾においても共働き家庭の増加などにより生じている「小1の壁」を打破するとともに、次代を担う人材を育成するため、全ての児童が放課後等を安全・安心に過ごし、多様な体験・活動を行うことができるよう放課後児童クラブ及び放課後子供教室（以下子供教室）の計画的な一体型の整備等を進めるものである。少子化による兄弟の減少とSNS・電子ゲーム機の普及で子どもの異年齢交流の機会や社会性の育成の機会が減っている現状がある中、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）は、地域社会、学校生活だけでは十分経験できない異年齢交流の体験を補うために、文部科学省の推奨する異年齢での交流、特に、社会性の涵養は重点課題としている²⁾。

春日部市は、全国と比較して、年少人口割合が低く老年人口割合が高い、また合計特殊出生率は1.17と低い³⁾ことから今後の少子化がさらに進むことが予想される。また、女性の就業率をみると共働き世代が多いことが推察されることから、春日部市に焦点を当てることとした。研究の対象は、すべての子どもを対象に、地域の方々の参画を得て学習や様々な体験・交流活動、スポーツ・文化活動等の機会を提供する取り組みの場である「子供教室」（文部科学省、2018）とした。

2. 目的

放課後子供教室の場の実態とニーズを明らかにするとともに、異年齢で交流する活動に焦点を当てた

活動を企画実施し、小学生の社会性に与える影響を明らかにする。

3. 方法

本研究では、調査研究（研究1）および実践研究（研究2・研究3）を行う。

（1）2018年度～2019年度

研究1「小学生と大学生の異年齢交流が子供の社会性に与える影響」

①目的：子供教室の実態とニーズを明らかにする。

②対象：子供教室の企画、運営全般を担っている子供教室のコーディネーター5名

③データ収集期間：2019年3月

④データ収集：半構造的面接法

⑤面接内容：子供教室での活動を通じて、子どもにどのような社会性を獲得してほしいと考えているのか、また、一緒に参加する大学生の役割への期待を尋ねた。

⑥分析方法：面接内容から逐語録を作成し、子どもの社会性の実態、大学生が子供教室へ参加することへの期待についてコードを抽出した。抽出したコードの類似性と差異性を比較し類似した意味を持つものを、カテゴリーとして抽出した。研究過程の全過程を通じて複数の研究者間で読み込み、分析結果の検討を繰り返し行った。

⑦倫理的配慮：所属機関（第30084号）の倫理委員会の承認を得て実施した。

（2）2019年度

研究2「子供教室において大学生と異年齢交流を経験した子供の社会性の変化」

①目的：大学生と小学生、異年齢の小学生同士の遊びを通じたプログラムを実施し小学生の社会性への影響（ソーシャルスキルの変容、自分とは異なる年齢の人々との交流促進の状況、年長者からの学び、年少者への配慮、コミュニケーションへの意欲の変化など）を明らかにする。

②対象：本研究で企画する子供教室に2回とも参加する小学生30名、子供教室コーディネーター1名、大学生10名

③データ収集期間：2019年9月～2020年1月

④方法：春日部市立小学校の子供教室にて、大学生と小学生および小学生間の異年齢交流を促進させる子供教室2回を企画実施し、小学生を対象とした自記式アンケート調査(事前1回、活動日事後2回、追跡1回)による統計的分析及び子供教室コーディネーター(活動日事後2回、追跡1回)及び大学生(活動日事後2回)を対象としたインタビュー調査による質的分析を行う。

アンケート項目⁴⁾は「挨拶や感謝」・「仲間づくり」・「思いやり」・「緊張」・「助言や注意」・「相談」の6つの観点からなる15項目、子供教室での活動の振り返りを尋ねた9項目、心情を尋ねた3項目であった。回答は、全て2件法であった。コーディネーターと大学生の視点から、子供教室に参加している小学生の様子を振り返るために、「大学生とかかわる様子について」「他学年の人とかかわる様子について」「遊び・活動への興味・意欲について」「あいさつ、言葉遣い、話を聞く様子、などの態度について」「そのほかに気づいたこと」の5項目について、面接調査を行った。

⑤倫理的配慮：所属機関(第19039号)の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

(3) 2020年度予定

研究3「子どもの異年齢交流や社会性を向上させる子供教室運営と関わり方のモデル構築」

①目的：子供教室へ参加した子どもの社会性の獲得と評価及び獲得の過程を明確化する。

②対象：小学生と保護者30名ずつ、大学生10名

③データ収集期間：2020年5月～2021年1月

4. 進捗状況

(1) 研究1の結果から

子どもの社会性の変化への期待として、3つのカテゴリーが抽出された(表1)。子供教室において大学生との交流への期待では、5つのカテゴリーが抽出された(表2)。

表1 子どもの社会性の変化への期待

カテゴリー	サブカテゴリー
異年齢の子ども・大人との交流で様々な人と関わる方法を身につけていく	子どもから挨拶はしてくれる 年下の子どもの面倒を見るようになる
子どもが気持ちの拠り所を得られる	家族に内緒のことも子ども教室では自由に大人に話せる 子ども教室で体験することで、子どもが面白さを発見できる
子ども教室で得た学びから子どもが自信を獲得していく	子ども教室で「できた」喜びから自信を得る 子ども教室での学びを子どもが自分で発信していく

表2 大学生との交流への期待

カテゴリー	サブカテゴリー
本気で遊べる大学生と関わることは子どもは嬉しくてたまらない	子どもが本気で遊んでも大学生なら受け止めてくれる 大学生と接することは嬉しくてたまらない 子どもと大学生は信頼関係が築きやすい
子どもに人との関わり方を示し教えてほしい	大学生の姿を見て、子どもは人との関わり方を身につけていく リーダーとしての在り方を子どもに示してほしい 大人に対する言葉遣いと態度を教えてください お礼や感謝を表現できるよう教えることが必要
子どもが「あなりたい」将来像を描くことができる	子どもが「あなりたい」将来像を描くことができる
大学生が子どもや社会を理解する機会になる	大学生が子どもの姿を理解する機会になる 大学生が社会を知る機会になる
大学生との関わりは運営側にもパワーをもらえる	大学生との関わりは運営側にもパワーをもらえる

(2) 研究計画

表3 研究計画及び進捗状況

	2018年度		2019年度		2020年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
ニーズアセスメント調査	子供教室視察・研修会参加					
研究1		調査	分析	論文文化・投稿		
研究2			調査	分析	論文文化・投稿	
研究3					調査	分析

5. 引用文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省：～「新・放課後子ども総合プランについて(通知)平成30年9月14日
- 2) 子供の社会性が育つ「異年齢の交流活動」. 国立教育政策研究所生徒指導研究センター生徒指導支援資料3, 2011
- 3) 春日部人口ビジョン(平成28年)
https://www.city.kasukabe.lg.jp/shisei/shisaku/sogoshinkopro/sougousenryaku/sogosenryaku_ike.n.files/zinnkoubizyonn.pdf (2018.6.15アクセス)
- 4) 新川広樹、富家直明. 児童生徒の学年・学校段階に応じたソーシャルスキル尺度の開発—学校現場におけるコミュニケーション教育への活用に向けて—北海道医療大学心理科学部研究紀要11, 2016

6. 研究発表

(1) 公表した又は公表予定の論文

- ・森田満理子、保科寧子、藤枝静暁、上原美子、黒田真由美、松本佳子、張平平、望月浩江. 放課後子供教室における異学年間の交流促進を目的とした実施報告—教員と大学生の共同による準備と当日の展開—子ども・教職研究第3巻2020.3

(2) 公表した又は公表予定の学会発表 今後検討

7. 本研究と関係する獲得した外部資金 なし